

教育科学研究会通信

京都教科研例会案内 366 号

8 月号



京都 長岡天神 八条が池

日時 2023 年 8 月 26 日（土）pm6 時 30 分～（日程変更注意）

場所 ZOOM オンライン開催

内容 第 349 回 8 月京都教科例会

提起

夏の体験・経験交流

—教科研 夏の大会報告もかねて—

提起

参加者全員による交流

8 月例会はオンライン開催で、それぞれの夏の近況を語り合い交流したいと思います。研究会参加の報告だけでなく、旅行や夏のくらしを少しのアルコール？やお茶をのみなながら気楽に交流できたらと思います。参加ご希望の方は事務局までおしらせください。URL 送信します。みなさんの参加をおまわしています。

366 号目次

1, 8 月例会案内		1
2, 7 月例会報告	寺井治夫	3
3, 連載 (11)	吉益敏文	13
4, 編集後記・ニュース		14

京都教育科学研究会第 348 回 7 月例会の報告

はじめに

7 月例会は教育 7 月号第 1 特集 ことばとからだ ことばを文字にとじこめない を中心に討議しました。 今後の例会のありかたについて交流し、寺井さんの問題提起をうけ深めました。

提起

ことばとからだ ことばを文字にとじこめない
教育 7 月号 第 1 特集を読む

提起 寺井 治夫氏(京都)

今後の例会予定

- ① 開催は第 3 土曜 夜 6 時半を基本としますが、状況によって変更する。
(私事ですが吉益が大学のスクーリング出張で重なる日があるのでみなさんと検討して決めていきます)
- ② 例会内容は特集を基本に論文を選定するが、提案者の自由な思いの発表や参加者の問題意識、近況報告などを大切にする。
- ③ 京都教科研の例会を可能な限り無理せず継続開催をする。
ほっとする 楽しい例会を

※今後の例会のありかたについて少し交流しました。

- ◆ 毎月の開催は第 3 土曜を軸にしつつ、柔軟に参加者で考えていけばいい。
- ◆ 現場を離れたが、教育のことを自由に語り合える場があるのはうれしい。
- ◆ あまり固く考えず、月に 1 回 気楽に語りあえる場があるのはありがたい。
- ◆ 介護の現場は孤独だ。ほっとする場、自由に語り合って元気になる場が必要だ。
例会に参加すると力になる。ぜひ 続けてほしい。
- ◆ 今後、渡部会長の意向を大切にして事務局と相談しながら運営がすすんでいけばいいのではないか

等々の意見が出され、基本的に事務局案を深める形で今後も運営していく予定です。

◆特集予定

9 月	第 1 特集	教育政策	第 2 特集	本 雑誌	教育学
10 月	第 1	生徒指導	第 2 特集	大学の学び直し	
11 月	第 1	勤務実態	第 2 特集	子ども庁	
12 月	第 1	特別支援	第 2 特集	「公立」のありかた	

▲例会計画○は第 3 土曜以外です。

- 8/26 (土) オンライン例会 懇親会
- 9/16 (土) 9 月号特集 教育政策 提起 大西さん
- 10/21 (土) 10 月号特集 大学教育 提起 井上さん
- 11/25 (土) 11 月号特集 公立の意味 提起 渡部さん
- 12/16 (土) 懇親会

大会予定

詳細は教科研 HP を参照してください。そこから申し込んでくださいね。

2023 年 8 月 8 日 (火) ～ 8 月 10 日 (木)

形式 対面&オンライン

初日「教科研講座」・映画「プリズン・サークル」上映は対面のみ
会場 飯能市市民会館

9 日 10 日 自由の森学園中学校・高等学校

例会報告

寺井さんは6 pにわたる丁寧なレジメにそって報告されました。(以下別紙参照)

京都教科研7月レジメ 2023.7.15

第1特集「ことばとからだ ことばを文字にとじこめない」 by 寺井

「あいだを生きるからだ」 岩川直樹(埼玉大)

人は、人とのあいだを生きることで、人間になる。

人間的な生(人生・生活)の次元は、人と人との固有のあいだを生きることで織り成される。

人は、このあいだを、からだとことばの全体で生きている。

あいだを生きるからだ(土台) → あいだを生きることばが生まれる

その交流のなかで、からだとつながることばがつくれ、

自分自身の気づきや思考がつくられていく。

教育は、あいだを生きることを、その不可欠な土台にしている。

あいだを生きるからだ

父が子に「おもしろい雲だね」と言う場面…人と人とのあいだだからこそ生まれる出来事。このシーンは、父が子にまなざしを向けた時から、その動きが始まる。

その時父のからだは子に向かいながら、子のからだに向かっていくものに向かうとしている。

デューイ:「関心」—ある姿に関心を起こし、その姿に呼びかけを感じ、応えようとするとき、相手と自分がつながりながら共通の状況に参加する関係が生まれる。

ブーバー:「対向」—自分を相手の方に向ける動き。…対話的な生の起点となる「根源運動」 その動きは、まなざしの引き締めや足の踏みしめにまでゆきわたり、それを起点に「他者と自己に共通の状況」に「他者の極からも経験する」。

「関心」「対向」— 自分を相手に向けるからだぐるみの存在の動き…岩川:「重心移動」

相手と共に状況に関わることができる＝「あいだを生きる」

山路に咲く竜胆を母と子が並び見る…母は子どもにとっての花を、子は母にとっての花を互いにからだのどこかで感じ合いながら、相手と共にその花を見る喜びを味わっている。

人は、動物的な強い感覚に欠け、特性の高さを誇れない存在であるが、

人間の本質は、あいだに生起するふれあいと分かち合いのゆたかさにこそある。

あいだを生きることば

特別支援学級に通うユウヤ(寡黙)と臨探のハラ先生

赤いトマトをじっと見つめるユウヤの隣にしゃがんで、ハラ先生が並び見る。

ユウヤの姿を呼びかけと受けとめるハラ先生の行為に、ユウヤも呼びかけの意味

を見る。やがてユウヤは「ぼくももってる」と、プラレールのことを話す子らの輪に入る。みんな大喜び。皆で作った畑の大根を家に持って帰った日、ユウヤは台所でその調理をじっと見る。

からだとかからだのあいだに幾重にも寄せ返す波があるからこそ、そのしぶきのようなことが生まれる。いや、互いにふれあい共になにかを分かち合うかぎりからだとからだのその呼応と共有そのものに人間のことが原型があると見るべきだろう。…人間の対話的生

からだとことばをつなぐ

ハヤシ先生の授業での問い「ごんがしたことは悪いことなのか」→ ヨウタ「わるい」

(ノートに)

アカネ「ごんは寂しかったから、いたずらしたんだと思う」→ ヨウタ「そうだ、理由がある！」

ヨウタはずっと考え続ける。友だちの助言？に困るヨウタの横で、ハヤシ先生は何度も言う。

「でも、ヨウタくんはちがうんだよな」→ そのうち、ヨウタは分かった、

「ごんは兵十のことがわかって、いたずらをやめたんだ！」

世の中で言う「対話的」とはなに？ ことばを口にしていれば対話的？ グループワークしてたら対話的？

これらは往々にして日ごろの権力関係を再強化する密室になる。

授業が対話的になる土台は、一人ひとりの子どもに向ける教師の関心と応答にある。

自分のからだをつながる自分のことば → ヨウタ自身の気づきと思考が生まれた。

相手とふれ合うなかで自分にふれ、自分にふれることで相手にふれ直していく。

この時代と社会に生きていて、相手にも自分にもふれられないからだになることがある。ケイタのせいで話が進まない。何か言うと誰かを責め立てる。分がわるくなると無言。

ケイタの世界には、<責める—責められる>の関係しかない。

モノサシの三角形をケアの三角形に

ブーバー：人と接しながら自分の枠組みのなかにすぐさま舞い戻る動き＝「翻転」

対話的な生（対向）の対極をなす、独話的な生の根源運動である。

デューイ：状況にふれるなかで生まれる「知覚」／ ふれるまもなく自分の図式に舞い戻る「再認」

「タッチ&バック」のバックが速すぎると、(対象に一方的にさわることはできても) 相手にふれ、相手とふれあうコンタクトは生まれない。そこには、自分の尺度で対象を裁断する「モノサシ」の視線と、相手に自分を傾ける重心移動を起点とする「ケア」のまなざし、の違いがある。

まわりからモノサシばかりを向けられていると、自分が自分にモノサシを向け、

まわりにもモノサシを向けるようになる。反対に、誰かにケアされるなかで、自分が自分をケアし、誰かをケアすることができるようになる。

「誰かに〇〇される」(受動)と「自分に〇〇する」(対自)と、「誰かに〇〇する」(能動)。この三つの頂点からなる「かかわりの三角形」の連動のなかで、それぞれの私の存在と同時に、私たちの生きる場が織り成されている。

朝会で声を上げ始めたタケルを注意しようとしたナガセ先生が、立ちすくむ。

後のハルナがタケルの背中をさすっている。—「大丈夫だよ、落ち着いて」

ナガセ先生の目にはじめて、タケルの強ばった顔が見えた—(ふざけているのではない)

タケルは、朝会の場の緊張に耐えられず、体を揺らして声をもらしていたのだ。一方的な「注意」が相手への「傾注」に変わり、「どうしようか」が「どうしたの」に転じ、モノサシの三角形のただなかにケアの三角形が動きはじめる。

結局、ナガセ先生は一言も発しなかった。だから対話は生まれなかったと見るのか、それとも注意のコトバをのみ込んだ沈黙のなかでこそ対話が生きられたと見るのか。

霜村三二(埼玉・公立小)「ことばはからだと共に」

高学年担当が続き、困難と辛さを見せまいとする「指導性発揮」像に、疲れきる。→低学年担当に。レク活動に参加する教員は、プリントを読んでから動く。—ことばでの指示・理解を優先。ことばとからだを切り離していることに無頓着。保育者の方は、まずからだを動かして子どもみたいに遊ぶ。—「ことばとからだ」の一体性。遊びを重視した実践観へ。

- ①音声の重視、音声はイメージを伴う。
- ②絵本の読みも文字にとじこめない学び(イメージと音声表現、知的なわくわく)。
- ③共同の学びでは、発言や身体化などを、エピソードの記憶として大切にする。
- ④ことばで遊ぶ「デザート授業」(遊びを子どもとともに作り出す重要さ)。

村上博文(白梅学園大)「就学前の子どもの育ちと保育」

「赤ちゃんを抱くと、反りかえる」—からだのこわばり・緊張。

世界・他者への拒否感を身につけた子ども…愛着障害か。

ことばを発したときの響きの美しさやリズムのおもしろさを、子どもに感じてほしい。

木村大望(成城学園初等学校)「劇の授業のない教室で」

成城学園初等学校の「劇科」1925～ 3年生～6年生に15時間/年。子どもたちは劇が好きだ。

1年生のひいちゃん：折り紙で折った動物が友だち。やがて愛ちゃんと二人で「物語」

を共有。クリスマス会で二人が「二匹の猫」を上演。 ごっこ遊びを披露してくれた。
表現は自己の表出であり、自分自身を充実させるものとして出発する。

「みんなに見せたい」という意欲を持って、舞台上で表現したいという事実を超えるものは何もない。

「劇の時間」は、目の前の子どもたちが安心して心身を解放できる機会を設けるだけ。
今の学校現場に劇という活動はあまりに大きすぎるのかも知れない。それならばいつ
そのこと、劇という活動を解きほぐして、表現やからだというもののヘダウンサイジン
グするとよいだろう。劇はできなくても表現は引き出せる。からだは動かせる。

そういう視点から教室を見渡せば、ひいちゃんのような子たちはおそらく大勢見
つかるだろう。

古賀千穂（元川崎市立小）「演劇的表現活動で子どもも教師も変わる」

4年生の国語で物語創作に取り組み、それが学級演劇に発展し、川崎市立小学校の学芸
大会に出場。 演劇指導のため、日本児童劇作の会「演劇教育夏期大会」で学習（実演
の大会）。 川崎市立小学校研究会内の19研究会の中に、「児童文化研究会1993年
（←学校劇研究会）」1951年～

2022年：①学習のまとめとしての表現活動 → 学習発表会につなげる授業。

「穴あき脚本」。CM仕立てで動作化を図る（ex. 町の人調査）。

②強化の狙い達成のための表現活動を取り入れた授業。 ex. 豆太イン
タビュー。

＜授業の参観 → 追体験 → 協議 → 助言（学芸大の渡辺貴裕先生）＞

子どもたちにつけたい力を考えてテーマを選び、脚本を創作。

子どもへのアンケート → 「話をしっかり聞けるように」「協力できるように」etc.

プロット作り、音響、技術指導、交流などで、劇作がチーム化する。

矢野利裕（中高一貫校・批評家）「外にある言葉と演劇的な身体」

「主体的・対話的で深い学び」をめぐる議論が一方で、
思考することそのものの身体性を後景化していないか？

「自分の外」にある言葉

発表形式の授業（ex. グループワーク・プレゼンテーション）は、

あらかじめ発表者の中に何かしらの考えがあることを、発想の前提としている。

しかし、思考と表現行為は、それほど段階的になっているわけではない。

他人に語る行為を通じて自分の行為が明確になることもある。

自分の考えが人に伝えるほどに整理されているとも限らない。

思考と表現行為はむしろ、身体という水準で通じている。

鶴見俊輔：かんがえるということが、まず生まれた時から自分の外で行われている大人
たちのやりとり（つたえたり、つたえられたり）をきいてはじめてできるこ

とで、つまり、かんがえることはつたえるという外面的な行為の内面化なのである。

自分の考えが「自分の外」からやってくる—「自分の外」にあるものに自分の身体を重ね、真似をし、そして自分の考えらしきものが形成される。言葉を獲得する行為自体、「自分の外」にあるものを身体に馴染ませていく行為である。

小林秀雄：誰が悲しみを先ず理解してから泣くだろう。先ず動作としての言葉が現れたのである。動作は各人に固有なものであり、似せがたい絶対的な姿を持っている。生活するとは、人々がこの似せ難い動作を知らず識らずのうちに幾度となく繰り返す事だ。そこから似せ易い意が発生するに至った。実際、子供はそういう経験から言葉を得ている。

子供は意によって言葉を得やしない。真似によって言葉を得る。

発表形式の授業は、自分のなかになかった新たな考えを生成するためのものである。

発表の授業でコミュニケーションを嫌う生徒にはどうするかと問われて、アメリカの先生が答える：

〈司会〉とか〈質問者〉とか役割を決めているのは、話すのが苦手な人のためでもある。人は役割の意識があれば話しやすくなる。場合によってはセリフも決めてしまう。

グループワークは、必ずしも、自分の考えを他人に伝えることを目的としていない。それ以上に肝心なのは、役割（司会者・質問者）を担い、それを振る舞うこと。その振る舞いの一環として、生徒は身体を動かし、言葉を発する。

演劇的な振る舞いとして

ブラジルで活動する演出家アウグスト・ボアール：

同じ機能をもつものはいっしょに立居振舞が似通ってくる。

芸術家、軍人、宗教家、教師、労働者、農民、地主、没落貴族……

1970 年代初、ペルーの民衆演劇運動において、人々の身体の動きを「意識させ」ようと、「参加した人々のからだの動きを解剖する」練習。ex. 「催眠術」 自分のからだを再構造化。

私たちの身体が「ふだんの生活」の中で知らず知らずのうちに型（ステレオタイプ）にはまっている。それを自覚するために、「ふだんの生活」で行わない身体の動きをする必要がある。

言葉の水準においても同様である。

課題に応じる作文（文章）に決まり文句（ステレオタイプ）を多くの生徒が加える。自分の考えや自由な発想を打ち出そうとするときこそ、人は往々にして型にはまってしまう。型にはまることを否定せず、自分のとらわれている型を意識することが大事である。

ペルーの民衆演劇運動は、「総合識字計画」の一環であった。

← 教育学者パウロ・フレイレの実践

演劇における身体的な振る舞いが「新しい言語」をもたらし、その「新しい言語」が「新しい内容」の「発見」をもたらしている。ある型のなかで発見された言葉こそが、演技者に「新しい内容」をもたらす。

ふたたび「主体的」であることをめぐって

ポアール：「観客」から脱して「俳優」の身体として振る舞うことこそ「主体」＝「行為者」である。「自分の外」にある言葉を通じて思考をめぐらすことは、それだけで十分に「主体的・対話的な学び」になりうる。一斉授業か発表形式かは、「主体的」であることをめぐる表面的な問題である。

藤原由香里（京田辺シュタイナー学校）「再び、立ち上がる。」

○自分の体験としての「立つ」こと

幼少期 — 緊張しすぎ、赤面しがち。バレエで舞台に立つうちに、舞台では自由になれた。

中学校 — 自分のからだのみ込まれるよう。姿勢・歩き方に葛藤。

思春期の難しさ

大学 — ダンス部で自分のからだへの信頼を得る＝からだが自分のものに。

自分が自由に

小学校教員 — かつての自分が表現に救われたように、子どもたちが表現に出会う機会をつくりたい。→ 授業に演劇や身体表現を取り入れ、芸術家を招く。

校内で演劇的手法をテーマにして授業研究。「学びの空間研究会」（渡辺貴裕先生と）。

○大人は頭もからだも重い。何かをやる時には、ねらいや計画を立てないと始められず、上の立場の人に確認しないと動けない。

渡辺さんに教員研修に来てもらい、「頭で考えること」を一旦脇に置き、

椅子から立ち上がり、学習者となり物語をからだや空間を使って味わってみた。→ からだを使って十分に教材を味わうことによって授業のアイデアがたくさん生まれてきた！

これまで言語中心の指導案検討で起こっていた様々なすれ違いが、体の感覚を真ん中におくことで、明らかに減った。研修には笑顔があふれ、手応えがあるものに変わる。研修が楽しい！

事後の検討会でも、発言の質が変わり、場を転換する力を発揮した。

ざっくばらんに言える。今まで周辺的だった意見が輝き、議論を深める。

自分のからだの感覚に基づく言葉は、誰からも否定できない力強さがある。

共同体の中で弱かった立場や抑圧された存在が、体の感覚を得ることを通して、力ある存在となっていく。

からだの声を聞くことは、一人ひとりの立場になってみて感じることであり、その人個人の感じ方を尊重することでもあった。→ 民主主義の土台へ。

公平でフラットな学びの場を自分たちで作り上げる中で、研修の雰囲気は一変していく。

○京田辺シュタイナー学校では、天と地の間にまっすぐ立つことが、とても大切にされる。

朝の会、授業の始め終わり、帰りの会では、「立つ」場面がある。

歌ったり、詩を唱えたり、挨拶したり。自然にまっすぐ立つ。数分を費やすこともある。

私は、からだを動かしながら詩を唱え、数を教え、「からだ」を育てることを大事にする授業を行っている。自分のからだの主人になっていくことは、生きていく上で自由になっていくための、かけがいのない宝だと感じる。

どのように立つかは、どのように生きるかということと直結する。

「空間を共にして身体を通して学ぶ」渡辺貴裕（東京学芸大）

教育の方法を考え、語るとき、人が身体をもった存在であることが、しばしば無視されてきた。

グループの作業でも、模造紙と付箋を使って、わいわい言いながら作業していた…。

共同注視と身体

「雲が浮かんでいる」「どんな雲？ 書いてみよう」…空間を共にしながら学ぶことによる可能性。

「共同注視」＝①共に同じ対象物や出来事に注意を向けること。

幼児の発達においても「経験世界を他者と分かち合っていくための大切なステップ」 言語習得上の土台。（使う感覚は視覚に限らない）

②相手が同じ対象に注意を向けていることを（私が）認識しており、相手も私が同じ対象に注意を向けていることを認識しており、しかもそのことを私が認識しているということ。

共同注視を行う主体は、身体をもっている。活動的で同機づけられた身体をもっている。感情面での呼応や共鳴が生じるのが、空間を共にしながら学ぶことのもつ強みである。

共同注視と見立てによる架空の世界の創出

現実世界：まず対象物があって、それに対して共同注視が起こる。 逆に、

演劇：共同注視が先にあって、対象物が（架空の次元で）生まれてくる。

対象物に対する注意の向け方や反応の仕方によって、さまざまなものを生み出すことができる。…「見立て」＝「○○として」扱ったり反応したりすること。

共同注視や見立てといった行為そのものによって、架空の世界が生み出さ

れる。そして、その架空の世界における事物や出来事は、当人らの身体を通して経験される。

エアなわとび：「見えないなわ」（架空の縄）を2人が回すのを、一人ずつ入って跳んで抜けていく。これをする、なわが見える。跳べたらうれしいし、引っかけたら（不思議なことにそれは本人にも周りにも感じられる）「しまった！」という気になる。

演劇的な活動は、身体がもつ、経験を分かち合う力をフルに活用する。

日頃は意識しなかったり埋もれていたりする身体の働きが活性化する。物語文の学習でも、本文を読んで話し合い、共に動いて架空の世界を生み出すと、身体感覚を働かせて世界とかかわり、他者とその経験を分かち合っていくやり方そのものを学ぶ。

デジタルと身体

テクノロジーがもたらすものは、（外山健太郎の言を借りると）あくまでも「増幅」である。

テクノロジーを導入すれば何かが突然解決できるようになるわけではないし、テクノロジーが入ることで突如問題が降って湧くわけでもない。

身体感覚が学校教育においてなおざりにされているように感じられるのだとしたら、それは、「GIGA スクール構想」や「一人一台端末」のせいではなく、

もともとそうだったのだ。ただ、それがより助長されているだけである。

身体には、全身の感覚を使って感じたり、他者と何かを共有したり、想像の世界を生み出したりと いったさまざまな力がある。しかもそれは、特別な機材を用意しなくても、発揮することが可能だ。

実際、「雲が浮かんでいる」の授業例のように、それらはこれまでも学校の教師らによって（一種の「熟練の技」や「センス」として）しばしば役立てられてきた。

ただし、それはしばしば無自覚に行われていたり、余りに自然すぎて気づかれなかったりしてきた

交流・討議

※ここからは吉益の覚書です。正確な録音ではないのでご容赦ください。

山田： からだを大事にする教育をうけてきませんでした。生徒にどういふことばかけをするかにこだわってきました。人間関係と言葉を意識していた。孫の言葉の獲得をみると 関係がひろがる中でことばがうまれる。 ことばをききとるために 社会認識が大切、子どもの成長との関連を考えています。キッズカレッジ 窪島教室に参加して 文字とことば 発達障害について学んでいます。

芦田： 報告よくわかりました。AI のことが話題になっていますが、チャット GTP これは文字の中に子どもを追い込んでいくのではないか。教育の中に持ち込んでいると思います。文字のない世界の指導 障害の重い子どもたちは体で表現します。体 眼球

笑顔など、今回の実践の意味（特集）はそういうところにあるのではないかと思います。

大西： ことばの定義を新たな角度から提起している特集だと思いました。
学校現場で。授業の前「姿勢を正してください」こういうことばに意味があるのか。「はい」と返事する。自分のことばとして伝わってない。セリフ 音声のみではないか。授業の終わりに姿勢を正す。意味があるのか。ことばがからだをくぐっているのか。これは生きたことばにならない。対話的 形だけになっている。うけとめようとする能動的態度がないと聞けない。言い方 しゃべりかたの形だけの体験 スタイルは求められている。理屈ぬきで形とことばを取り入れる今の現場のこわさがあると感じています。

野中： 安部 岸田のうそが氾濫して 偽善的な要素が社会を作っている。
きれいごとのうそが横行している。こころが癒されることば 安心してできることばが必要ではないだろうか。ことば ブーバー 内面的精神の交流についてゼミでよく学びました。

寺井： ことば 体の関係で 体が悲鳴をあげている。デジタル対話 ICT 増幅するだけ以下に都合のよい論理を押し通すだけ いんちきだ。新自由主義を内面化している。

芦田： 同感します。かつての遠山啓の数認識を思い出しました。文科省 言葉を文字におしこみ AI でコントロールしている。ことばを文字におしこまない実践が必要では。

山田： ことばを文字におしこまない からだとの関係を学びました。

大西： おもしろい論議 ことばとからだの関係を再認識しました。立場が違う人も納得してしまう。広い視野で読む必要があるのでは。

野中： どういう言葉が胸に響くのか 娘との対話で 身近に胸に落ちることばは何か考えています。鈴木大拙を読んでいます。東洋的なことば 人間的なことば 若い人へのことばを再度 考えています。

寺井： 生活綴方の精神 教師がかけることばの意味が重要ではないか。夏の大会でグループワークの授業 古文の授業 英語の授業に挑戦します。この夏の分科会で報告討議の予定です。 第1特集 励みになりました。

連載 11 語り合える場としての臨床教育学を

吉益 敏文

ある体験から

2011 年の 3 月 19 日、武庫川女子大学で開かれた日本臨床教育学会の設立総会で、私は次のような発言をしました。当時、小学校の現場で働いていたので「自分が働いている職場で若い人やベテランの教員が何も語らずに突然退職するという事態が続いています。あとから聞くと、学級が困難な事態になり一人でしょいこんで、皆に語らず辞めてしまったということです。病気になったり自ら命をたった人もいます。この学会が現場の教職員の悩みに寄り添い考える学会になってほしいです。(要旨)」というような発言をしました。私自身が教職員組合の専従書記長の仕事を終え現場に戻った時、「学級崩壊」状態になり精神的にもおちこみ外出もできない事態になった経験があったからです。何度も「教師を辞めたい」と思いましたが職場の管理職をはじめ多くの教職員の方に励まされ、困難な事態をなんとかもちこたえられた経験があったからです。だからこそ一人で悩み自分を責め退職したり病になる人たちの事が気になっていました。もちろん困難な事態になった時、休職したり教師の仕事を辞めるという選択はおかしなことではありません。その時に自己責任や本人の力量だけの問題にするのではなく当事者の思いを聞き、安心して語り合える場が必要と思ったからです。

支えになった 3 つの学び

大学院で臨床教育学を学ぶ中で 3 つの事を学びました。今日の学校現場では複数の困難をかかえる子どもたちや保護者が学級に存在すれば、どんなにベテランでも若くて元気な教師でも「学級崩壊」のような状態におちいることはありうるということ。第 2 に子どもや保護者の攻撃的な言動は情動的表現としてとらえる。ワロンの身体、自我の概念から学び深め、子どもの内面について考えるということです。第 3 に困難に陥った時に自分ひとりでかえこまずカンファレンス会議などで提起することが大切である。医療現場のようなカンファレンス会議の質に到達するために何が必要かということを知りました。もちろん自分自身の実践についての省察や分析は必要ですが、そのうえにたつてこの 3 つの見地は大きな支えになりました。私自身の「学級崩壊状況」を俯瞰する上で大きな力となりました。

SOS を出す勇気を

私は大学で教師や保育士を希望する学生の人たち、NPO で放課後児童クラブの支援員の方たちと学ぶ機会があります。そこで困難をかかえた対人援助職の仕事にとって、自分の力でこどもが変わったとか自分の力ではこどもが変わらないなどと一面的に考えないように語っています。ある学生から苦しい時こそ「SOS を出す勇気が必要ですね。」という言葉が教えてもらいました。しんどい時、つらい時こそ素直に語る。それは簡単なようでなかなかできないものです。けれど人に語ることによって、自分で書いてまとめることによってだいぶ楽になります。臨床教育学を学ぶ意味かなと思っています。

(武庫川臨床教育学会ニュースレターに掲載したものを一部手直ししました。) 次回は渡部代表の予定。

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

① 抛るべなき時代に 後藤正治 ブレーンセンター

東京オリンピックの腐敗を開催前後から論じた後藤のエッセイは小気味よい。
抛るべなき時代に何が大事か、後藤は抑えた文章で語りかける。

② 教師のモラルとは何か 佐藤広美 新日本出版

悩みながら模索する。子どもの今の現実の中で、歴史の中で、モラルとは何か
子どもと親の信頼を得るために何が必要か、教師の誠実さの意味にもせまる。

③ 教員不足クライシス 山崎洋介・教育科学研究会 旬報社

教員が不足している、全国の公立学校で 2000 人以上の先生が不足。公立小中学校教員の約 6 人に 1 人が非正規。この現実に向き合うか。豊富なデータと論文で鋭く警告した書。

○ 決戦は日曜日 宮沢りえ・窪田正孝主演 2022 映画

とある地方の選挙。日本の選挙の実態を風刺したコメディ。汚職、買収スキャンダル、なんでもありだけど当選する「選挙」ひとつの風刺としてみると面白い。

編集後記・よもやま話

※今月号は 7 月特集についてです。ことばと身体という角度から考えてみました。

耳障りのいいことばがはたして心をとらえるのか、ことばと人間関係、など面白い討議ができました。寺井さんの詳細なレシメをおよみください。好評の佐藤研究ノート、今回は休載です。次回から新しい勝田研究ノートがはじまります。ご期待ください。

※8月例会は気楽な交流会をオンラインで計画しました。例会のこれからの方向の模索のひとつです。気楽にご参加ください。

※大リーガーの大谷選手の二刀流の活躍、ボクシングの井上選手の強さ、若い二人の躍動からいっぱいエネルギーをもらいます。

※酷暑お見舞い申し上げます。京都は祇園祭から一気に猛暑。お身体 ご自愛ください。